慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南部粤漢打通作戦における衛生関係部隊 : 第20軍『業務詳報』の紹介
Sub Title	Medical service in"Nanbu Etsukan Datsu"operation
Author	兒嶋, 俊郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.85, No.2 (1992. 7) ,p.337(217)- 351(231)
JaLC DOI	10.14991/001.19920701-0217
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920701-0217

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」85巻2号（1992年7月）

資料

南部粤漢打通作戦における衛生関係部隊

——第20軍『業務詳報』の紹介——

兒嶋俊郎

1. 序
2. 南部粤漢打通作戦実施の背景
(1) 作戦の背景と概要
(2) 作戦計画と経過
3. 前線における衛生活動
(1) 作戦準備
(2) 甲挺身隊「救護日誌」
1) 行軍開始—1月4日から10日まで
2) 本格的な戦闘の開始—1月10日から16日まで
3) 激戦と死傷者の激増—1月17・18日
4) 戦闘終了—1月19日以降
4. 南部粤漢打通作戦における戦死傷者の状況

1. 序

本稿は，1945年初頭に展開された南部粤漢打通作戦の実態の一端を，主として衛生関係部隊の資料を紹介することで明かにしようとするものである。紹介する資料は『南部粤漢打通作戦業務詳報桜部隊軍医部』(1)である。

南部粤漢打通作戦は，広東－衡陽を結ぶ南部粤漢線沿いの要所を確保し，さらに衡陽南東方面（具体的には，遂川，南雄）の飛行場を破壊することを目的として，1945年の1月中旬から2月末にかけて展開された。

この南部粤漢打通作戦自体については，防衛庁戦史室が刊行している戦史叢書の『昭和二十年の支那派遣軍＜1＞三月まで』(2)が詳しい。同書では，作戦構想の展開過程，部隊の編成過程，作戦の経過などが，後方兵站業務も含め，防衛庁戦史室に収集された第一次資料と，当時の関係者からのインタヴューに基づいて詳細に検討されている。

また佐々木春隆『最後の打通作戦』(3)は，南部粤漢作戦に第40師団一員として参加した将校の記録として貴重なものであり，挺身隊の活動についても乙挺身隊に関して詳しい記述があり，本稿においても参照している。

次に日中戦争における旧陸軍・軍事衛生関係の研究であるが，まず黒羽清隆「十五年戦争に於ける戦死の諸相」(4)（以下「諸相」と略す）を挙げることが出来る。これは，『茅野市靖国忠魂録』『平塚市戦没者名簿』等を基礎に，十五年戦争

注（1）『南部粤漢打通作戦　業務詳報』（（以下『業務詳報』と略す）。表紙に「軍事極秘」の印がある。1945年5月に統集団経理部経由で，野戦衛生長官部（大本営直属の衛生関係機関の統括部門）当てに提出されたもので，1944年12月8日から翌45年2月28日までの記録である。

（2）『昭和二十年の支那派遣軍(1)』（以下『支那派遣軍』と略す）。防衛庁防衛研究所戦史室，1971年。

（3）佐々木春隆『最後の打通作戦』，図書出版社，1991年。なお同氏は同じ出版社から『華中作戦』『長沙作戦』を刊行しており，ことに前者は本稿が扱う南部粤漢打通作戦の直前に戦われた衡陽戦役に言及している。

（4）黒羽清隆「十五年戦争に於ける戦死の諸相」『思想』，1971年8月号（後に『十五年戦争史序説（上）』三省堂，1984年，に所収）。

を通じての戦死傷者の特徴と，そこから伺える戦争の特質を明かにしようとしたもので，それによれば，1941年12月8日以降に於ける中国・蒙古・朝鮮方面に於ける戦死者の数が，1931年9月18日から1941年までのそれの約三倍に達しており，中でも注目されるのは，1944年・45年にかけて戦死者が急増していることである。黒羽はこの事実に基づいて戦争の激化が，対英米戦争のみによってもたらされたものではなく，中国戦線の状況も，対日戦勝利の上で大きな役割を果たしていたことの一つの証左であるとしている。

ところで旧陸軍の衛生関係機関については，陸上自衛隊衛生学校が編纂した『大東亜戦争陸軍衛生史』(全9巻)(以下「衛生史」と略す)[5]がもっとも体系的かつ詳細な資料を提供しているが，そのうち本稿に関係が深いものは，第8巻「軍陣衛生」所収の「衛生要務」，第9巻「戦訓及び体験」である。前者は陸軍に於ける衛生教育の歴史，その内容，戦時衛生勤務の体制等に関する基本的な知識を提供してくれる。後者では，各地で任務についた旧軍兵士の証言が参考になる。

2. 南部粤漢打通作戦実施の背景

(1) 作戦の背景と概要

1943年夏，参謀本部は中国国民政府を屈伏させる目的で，湘桂鉄道，粤漢鉄道，京漢鉄道の沿線要路確保を目的とする作戦の研究に着手し，この作戦を一号作戦と名付けた。翌44年1月24日，大本営は一号作戦発動を決意，4月の京漢作戦をかわきりに5月には湘桂作戦も開始された。

作戦は44年の10—11月頃にほぼ大勢を決し(11月，桂林・柳州を攻略)，12月以降は駐屯体制に移りつつあった。この結果南部粤漢打通作戦のみが取り残される状況となっていた[6]。大陸打通作戦は，国民党軍の腐敗と荒廃もあって一応の成果を収めたものの，約半数の兵力を本作戦に割いたため，日本軍占領地域の「治安」は著しく悪化することとなった[7]。

しかし1944年6月の在華米軍による北九州爆撃をかわきりに，米軍による日本本土への空襲は激化の一途をたどり始めていた。米軍は成都を基地として飛来しており，何らかの対策が必要だと考えられていた。

そこで1944年11月上旬，参謀本部は支那派遣軍に対して，(1)米軍の中国東南部上陸に備えること，(2)南部粤漢打通作戦と同時に遂行される遂韓作戦にかんしては，航空基地の破壊のみでなく確保も図ることの2点を指示した。

南部粤漢打通作戦は，以上の目的達成のため，広東—衡陽を結ぶ南部粤漢線沿いの要所を確保し，さらに衡陽南東方面(具体的には，遂川，南雄)の飛行場を破壊することとなった(地図1参照)。本作戦は，本来は44年の10月に開始される予定であったが，兵站拠点に予定された衡陽の攻略が遅れ，しかも甚大な損失を被ったため[8]，1945年に1—2月にかけて実施されることとなった。

(2) 作戦計画と経過[9]

1) 第六方面軍の作戦計画

作戦を担当したのは第六方面軍で，同軍は11月末までに作戦計画をまとめるとともに，必要な作戦部隊の編成作業にとりかかった。10月10日，第六方面軍の作戦命令が発令されるが，本稿で取り上げた第40師団が加わったのはこのときである。

第六方面軍の作戦計画によれば作戦の要点は

注(5)『大東亜戦争陸軍衛生史』(以下『衛生史』と略す)(全9巻)陸上自衛隊衛生学校編集・発行，1968—1971年。本書は一般に市販されてはいないが，国会図書館に2セット所蔵され閲覧することが出来る。

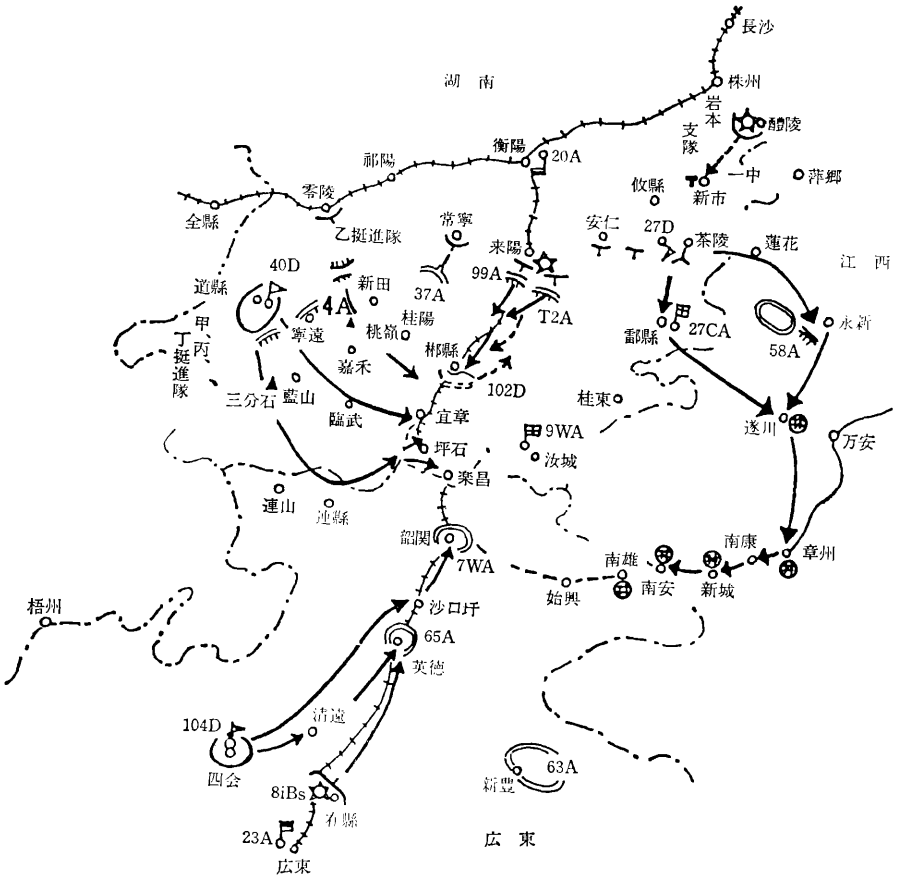
(6) 林三郎『太平洋戦争陸戦概史』(岩波書店，1951年) 141—145頁参照のこと。

(7) 石島紀之『中国抗日戦争史』「VI 第2次大戦末期の中国戦線」(青木書店，1984年) 参照のこと。

(8) 前掲佐々木『華中作戦』参照のこと。

(9) 以下の記述は『支那派遣軍』35—42頁による。

図1 作 戦 大 綱 図



2点あり，一つは南部粤漢線を無傷のまま確保すること，もう一つは遂韓地区の米軍航空基地を破壊することであった（地図2参照）。ことに南部粤漢線打通に当っては，ベトナムと中国南部とを連絡するため，鉄道関係の諸施設，例えば橋梁・トンネルなどを現状のまま確保することが強くもとめられていた。この目的のため，特別に隠密行動をとる4個の挺身隊が編成されることとなったのである。

本作戦には主として第20軍が当り，協同して行動する第23軍に対しては，第20軍に呼応して韶關以南の南部粤漢線を確保することと，同線確保の後ただちに南雄付近の米軍航空基地を破壊することが要求されていた。

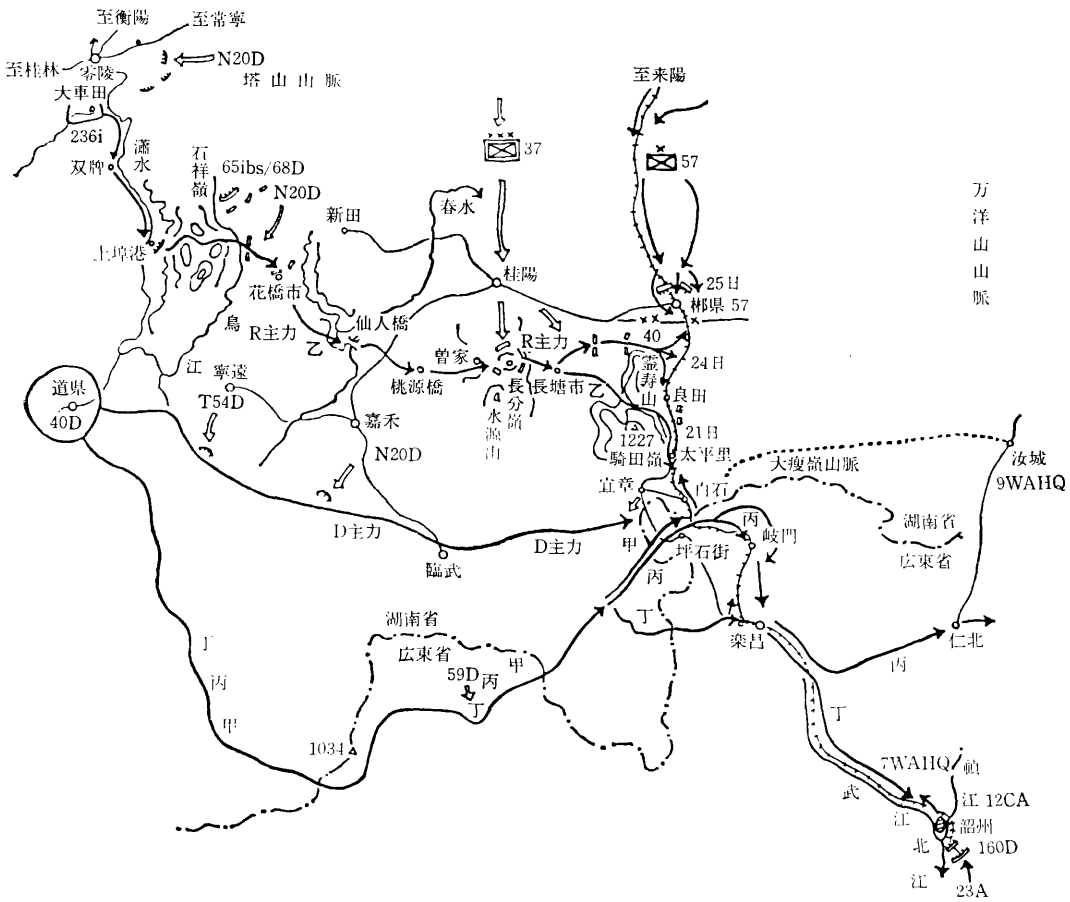
2） 第20軍の作戦計画

第20軍の作戦計画の主力となったのは，第11軍から転用された第40師団（本作戦用秘匿名称・宮）と，第57旅団（秘匿名称・黒）である。第40師団の主力は，道県に集中され，その他一部の部隊は零陵付近に集中された。また第57師団は，来陽に集中された。

第40師団は主力とは別個に1個大隊を基幹とする，甲・乙・丙・丁の4個挺身隊を編成し，甲・丙・丁の3挺身隊は道県付近より，乙挺身隊は零陵南東の石祥嶺より，各々隠密裡に師団主力に先だって粤漢線に向け進発し（行動開始は1月3日—13日頃を予定），鉄道線路と関連施設を確保することとした。(10)

注（10） 乙挺身隊は他の3挺身隊の行動を秘匿するための陽動作戦として別行動となった（前掲佐々木『最後の打通作戦』54頁）。

図2 挺 進 作 戦



各挺身隊は全員中国服（中国軍軍服もしくは便衣）を身に付け，台湾出身者（通訳）を連れ，極力戦闘を避ける方針をとった。これは隠密行動をとることが作戦上是非とも必要だと考えられたためであり，前進，停止，といった号令にも「走」「終止」といった中国語を用いている。師団主力と57旅団は1月18日を期して行動を開始し，挺身隊が確保した地域を占領し，その後一部兵力で同地域を確保すると共に，他の兵力を南雄方面に転じて第27師団と共に，同地域の米軍航空基地を破壊するものとされた。

また第27師団（本作戦用秘匿名称・極）は，1月上旬末頃をめどに，茶陵・連花付近に集中し，同月中旬末頃行動を開始し，遂川方面の航空基地に対する攻撃に当り，その後第40師団と協力し新城・南安方面の航空基地の破壊と確保を目指すこととなった。

本作戦は1月3日の甲挺身隊の出発によって開始された（乙挺身隊は13日，丙・丁挺身隊は7日の出発）。各挺身隊は19日—22日頃にかけて目標に到達，ほぼその目的を達した。その後第40師団主力及び，第57旅団は挺身隊の占領した方面の鉄道線路を確保，さらに第20軍隷下の第27師団（極部隊）は遂川方面の航空基地を第40師団と共に破壊・制圧し，2月末から3月始めにかけて作戦の主要目標を達成した（第27師団の韓州攻略は3月5日）。作戦の公式の終了時点は2月末日である。

本稿で紹介するのは，この間に於ける第40師団（宮部隊）の衛生部資料—ことに甲挺身隊関係—である。

3. 前線における衛生活動

甲挺身隊の記録は作戦中の部隊がどのような状態におかれていたかをリアルに記述した貴重な記録である。既に述べた通り，同部隊は第40師団に属する1個大隊を基幹とする部隊であり(11)（歩兵第234連隊所属），師団主力に先行して南部粤漢線を確保する為1月3日に道県を出発した。ここで紹介する「救護日誌」は，同部隊の中川軍医がつけていた日記であり，作戦期間中の戦死傷者あるいは戦病者の状況を子細に記録しているほか，強行軍の実態を本人の感想を交えながら記述している。また「衛生戦訓・衛生勤務」は作戦終了後，その後の作戦の参考資料とするためにまとめられた報告であり，作戦の全体状況の他，作戦に当たり軍がどのような点に留意したか，どのような事項に着目して教訓としたかなどが明確に解る資料である。以下ではまず「衛生勤務」によって甲挺身隊の作戦準備の概要を紹介し，それに続けて中川軍医大尉による「救護日誌」を紹介する。

（1） 作戦準備

1） 機密保持

同部隊は隠密行動を基本としたため「支那軍又は土民の服装に完全に偽装しかつ兵器資材装具の外見等も又これに一致せしむ…。日本軍の進出は軍靴の音にて暴露するをもって防音のため子一足及び草履三足を携行し軍靴の上に草履を履かせ」出発した。但し靴に関しては草履がすぐに破損したため4日目からは軍靴行軍となっている(12)。

作戦企図の露見を防止するための処置は衛生関係部員にも徹底されていた。簡単な号令は中国語でかけられたが，その他にも「絶対に俘虜とならざることを救護班全員に徹底しいかなる場合に於ても一切口を開かしめざること…，救護班員には命令その他の文書及び私物品は一切携行せしめず特に下士官以下に対しては地図要図手帳その他筆記類を一切携行せしめざること，…行動期間患者救護及び休宿間の遺棄物その他により我が行動を察知せしめざる如く跡始末を徹底すること」を命じていた(13)。

2） 食料・衣服・医薬品など

部隊は食料10日分を携行した。内容は，一般飯一日分（米は現地で徴発したものを利用），握り飯一日分，餅二日分，煎り米三日分，腸詰，あられ，干し芋，飴，落下生といったものである。このうち調理した米類は生煮えであったことなどから兵士の間に「若干」胃腸障害を引き起こしている。挺身隊が目標付近に達したのは18日頃であるから，この準備は量的にも質的にも不十分なものだったと考えられる(14)。

兵士は強行軍に耐え得るよう事前に体格不良者等が除かれていたが実際には行軍開始直後より衰弱者が発生している。これは一端出発した後一切補給が得られないため，体重の60—70%に達する装備・備品を背負って行軍したことが大きいであろう(15)。

病気に関してもマラリア予防のため「アリナミン」「ヒノラミン」錠が配られたが，作戦期間中8名（1.5%）の患者が発生しており，もう一つ関心が払われていた凍傷の予防に対しても，1週間以上の治療を必要とする者が4名発生したほか，ほぼ全員が風邪にかかっている。もっとも被服の状態を見るとよくこの程度で済んだと思われる。すなわち防寒外套は皆無。冬期用上着は全員着用しているものの，冬期用ズボン

注（11）『支那派遣軍』68—69頁。

（12）『南部粤漢打通作戦における宮部隊甲挺身隊衛生戦訓・衛生勤務』「一，事前準備に関する事項」。なお原文はカタカナ表記であるが，ここではひらがなに改めた（本資料は未公刊資料である）。

（13）同上資料「四，企図の秘匿に関する事項」。

（14）同上資料「一，事前準備に関する事項」。

（15）同上資料。

は60%，冬期用ズボン下は80%の着用率であった。しかも代用背嚢には食料を詰め込んだため替えの衣服はなく，夜間露営時には便衣（中国服）と天幕を防寒用に用いたものの用はなさなかった。[16]

3） 衛生材料[17]

次に衛生材料関係に移る。部隊が携行した衛生材料は個人用薬品が表1の通り。部隊携行衛生材料は戦傷100名分，戦病半月分をめどとして準備された。

部隊携行衛生材料は「戦傷用」と「戦病用」に区分され，前者においてはマーキュロ，酒精といった創傷治療薬と脱脂綿・ガーゼといった包帯材料が主たるものである。後者では，胃腸薬，マラリア剤（ヒノラミン，キニーネ），強心剤などが中心であり，これらの他には注射器，外科用機器等を携行していた。

これら資材の輸送はいうまでもなく衛生部員と一般兵によって行われた。これらの衛生材料は新岩下に到達した翌日の20日の時点で使いつくしている。[18] 戦闘終了後の21日以降の状態ははっきりしないが，戦闘が峠を越した19日に1回空中投下による補給を受けているものの，以後25日に師団主力が到着するまでのあいだ十分な治療ができたとは考えられない。ちなみに衛生材料のうちマラリア剤，包帯などは物資輸送中の盗難防止のため，別の品目のレッテルを貼るように指示している。

表 1　個人用携行衛生材料

凍傷膏	兵5名に対して1個
クレオソート	兵員の半数に対して各1瓶
内用「リヴァイル」錠	残余の半数に対して交付

4） 衛生部員の編成

衛生部員の編成は，挺身隊本部救護班に属するものとして，軍医2名，衛生下士官4名，衛生兵20名，補助担架兵5名の計31名と，患者収容隊として兵科下士官1名と衛生兵8名，担架兵11名の計20名の，合計51名からなっていた。このうち衛生兵1名と担架兵・補助担架兵各1名の計3名が戦死し，衛生兵2名と担架兵1名の計3名が負傷している。[19]

患者の輸送に関しても隠密行動を維持するとの観点からきびしい処置が要求されていた。「患者輸送区分の厳選」によれば，「特に潜進行動間は症状を詳細に観察し，患者の精神力に期待し輸送区分を厳選するの必要あり下肢の受傷なるの故を以ていたずらに担送とし又は私情を挟みて挺身隊の行動を破滅に導くがごときことは許されず」としていた。[20]

（2） 甲挺身隊「救護日誌」[21]

1） 行軍開始―1月4日から10日まで

日記は出発翌日の4日から始まっている。本格的な山岳地帯行軍は6日から始まり，9日まではほとんど戦闘はない。しかしこの間も捻挫，転落，機関銃運搬による鞍傷が発生しているほか，衰弱患者の発生・死亡を見ている。また日

注（16） 同上資料。

（17） 「衛生材料」の定義は「兵員の保健衛生，治療予防，試験検査など所謂衛生関係諸品の他，一切の医療用器具，診断用機械，修理用機械…，薬品類，包帯材料，戦地で衛生材料業務に使用する諸用紙類，照明具，天幕などを総称している」とされ広範な品目を含むものであった。さらに衛生材料品種によって，1器械，2薬物，3消耗品にわかれ，器械には医療器械，検査器械，磨工器械，輸送具，雑具な副木類，濾紙，試験紙等の検査用品などが含まれている。衛生材料はまた使用区分によっても，1戦用衛生材料と，2常用衛生材料に分けられる（「衛生材料」119頁『衛生史』第8巻所収）。

（18） 同上資料。

（19） 同上資料「二，編成準備に関する事項」。

（20） 同上資料「三，特に教育訓練すべき事項」。

（21） 同上資料　本日記は同上資料の第二部「衛生勤務」として収められているものである。

記の端々に厭戦気分とはいえないまでも，隠密行動に伴う制約に対する不満が顔をのぞかせている。

1月4日　曇り　青木山南方　「…軽度の捻挫若干発生」

「国運を賭す大使命を双肩に担って，昨三日2000道県を出発した。将兵は意気昇天の概を見せていた。最初は黙々として暗黒の闇の中を歩いて只聞こゆるは『終止』と『走』（日本語は使用せぬことになっていた）の号伝だけである。

もう一里も来ただろうかと思う頃より…前後で転ぶ音がする。…黎明となって見れば跛行者の姿がときどき見受けられる。大した重傷者もないらしい。初日から診断も余り縁起がよくないと思って放って置いた。

じめじめする森の中で冷えきった飯盒の飯を幾らか摂って付近の木の枝を集めて横になった…。1400頃ペンペンといふ銃声に起こされた。敵襲だと思ったが其の場を動く気持ちにもならない。敵と遭遇しても華々しい戦いも出来ない，只泥棒のように潜入一点張り，毎日こんな日が続くかと思うと厭な気もする。…後略…」

一月五日　曇り　獅子嶺　「悪路にして大隊長以下相当数の捻挫患者発生し，跛行者の姿を見受けしも受診を乞ふ者なし。一中隊の兵一名は，六米の断崖より転落し左の肋骨骨折するも歩行妨げなし」

「一略一」

＊6日，この日から昼間の行軍となり，同時に草履を外して軍靴による行軍となっている。転落者が出始める。

一月六日　曇り　挿花坪　「機関銃中隊弾薬手本日頃より逐次鞍傷を出ず。本日より草履を脱し昼間行軍に移る」

「…今日から愈々本格的に山に入った。こんな道で担送者が出来たらと心配になる。…朝食を喫して昼間行軍となった。思い思いの便衣をまとい，支那兵とも土匪ともつかぬ変な行列に自分ながら愛想が尽きる。

…患者が来た。昨夜本隊から離れて六米位の断崖より転落し胸が痛いと言う，上衣を脱がして診て見ると左肋骨を骨折している。『装具を外して歩いて行け』と命じたものの，装具を担いでいく苦力は一人もいない。困ったものだと思っていると，中隊の古年次兵がどこかに持って去った。…後略…」

＊7日，この日の記述に不十分な食料に対する不満が出ている。また第一機関銃中隊に衰弱患者が出ている。

一月七日　雨　（2字解読不能）を経て査江口行程24キロ

「…出発以来温飯一つ喰うでなし，熱い茶を一口飲むでなし，『いり米』と凍った『かちかち飯』では十分に咽喉も通らない。

一機の兵隊（追及補充兵にして出発時壮健）に相当衰弱したのが出た。聞いてみると，昨日位から食思が不振，脚力減退，頭重を訴う。診ると体は稍々羸痩し，脈伝頻度数僅かに白苔を衣し，体温37.7度，胸腹部所見なし，排腸筋握痛存するに依り軽度の腸病疑の下に，強心剤の皮下注射と重曹を与え，本夜の大休止点査江口に於て静養せしむ…後略…」

＊8日，冬期であるにもかかわらず兵隊が多量に水を飲んでいること，渇病者の発生をみていることから，兵士の疲労が大きいことが解る。

一月八日　雨　不明　「山頂の雨急に雪と化し…兵員の身体若干疲労せるようなり。一機中隊より，患者一名（衰弱と軽度の渇病）発生す。」

「…幸に昨日の機関銃中隊の兵も幾らか良くなり思ったより元気で歩いて呉た。四キロもいっただろうと思う頃に渡河点がない。『反転だ，

反転だ』という声が聞こえてきた。朝早くから起こしてこの態は何だと腹が立つ。実際夜間山道四キロを歩むには二時間以上を要する，不平が出るのも無理はない。湿った路傍の草村の中で飯を喰う。雨は遠慮なく降り注ぐ。…標高8—900米もある山を二つ越して三つ目の山頂にかかる頃，雨は急に雪となり寒冷身に染みるが真夏の行軍と同様，兵隊は水筒の水を盛んにのんでいる。谷間続きに降った山中の，図上にない不明地点に出た。山に明けて山に暮るる一何となく懐かしい故郷が偲ばれてならぬ。」

＊9日，相変わらず転落者が出ている。また衰弱した患者を衛生兵の付き添いのみで歩かせているが，この兵隊はこの日死亡している。又ほかにも衰弱した兵士の発生があるものの，担架の通行困難のため歩行させている。

一月九日　曇り鷹咀坪頂　「前日の一機患者遂に省界山脈の中腹にて死亡。部隊後尾は暗夜悪路を衝いての山道踏破のために一機の下士官一名転落し受傷す。二中隊の兵一名，軽度の渇病症状を呈せるも部隊と共に続行す。」

「0500…出発した。…機関銃の兵隊が気に掛かる，黎明となってみると軍衣を脱いで装具を外し，衛生兵の付き添いでぽつぽつと歩んでいる。『大丈夫か』と聞くと『自分は裸になると幾らでも歩ける』といって昨日と大差ない。…1500頃藍山一沙子嶺道に出た。ここで又敵と遭遇す，主力は早く本道を横切って，東方の部落に集結を命ぜられ銃声は間もなく消えてもとの静寂にかえった。

…後尾が遅れているらしい。又機関銃の兵隊が気に掛かり腰を下ろす。臀力搬送の機関銃が遅れていた。それから大部遅れて裸体の男が来ている。近寄ってみると案じていた兵隊だ，衛生兵に後押しされながら両手を『だらり』とたれ，酔漢のごとく，ふらふらしている。とても足元があぶない。早速診て見ると，相当高熱だ，意識は概ね明瞭，脈拍は，120位で目はくぼみ四肢にときどき痙攣が来る。一般状態は良くない。胸を診ると既に全面羅音だ，これは困ったもっと早く診るべきであったと後悔する。応急処置をしてみたが一向に反応がない。三分くらいその場に安静にして様子を診る。到底担げそうもない道だが是非もない。『担架一つ残れ』と前に号伝する。担架が来た頃には既に黄泉の人となっていた。

もう1930頃だろうか。標高1200米突の魔咀(ママ)坪頂を極めた頃は真っ暗になった降り坂が又急峻である。…途中で二中隊の兵隊が『へたばって』いる。聞けば二日ほど前から食事が進まないという。こんな所はとても担架は通らない。因果を含ませ歩かせる。2200頃魔咀(ママ)坪の部落に着いた。」

2）　本格的な戦闘の開始—1月10日から16日まで

10日に至り始めての本格的戦闘が発生し，戦死者1名，負傷者1名がでる。16日まで連日小規模の戦火を交えつつ前進。13日の戦闘は激しく戦死者1名，負傷者1名をだす。この間11日に回虫病（凍傷も併発）患者の発生を見るが，この患者は衰弱の後13日に手瑠弾によって自決している。また10日には右大腿軟部貫通銃創を受けた患者が発生するが，出血・骨折がないためそのまま歩行を命じている。この兵士は中国兵との戦闘の後，中国兵が残した拳銃の暴発によって負傷したものである。この日部隊通過途上の村に苦力徴発に出ているが，村民を見つけられずそのまま行軍を続けている。そのほか死亡した兵士の近くで何時もどおりに食事する兵隊達のようすがえがかれている。

担架兵の遅れが次第にひどくなっている。そのため担架を持たない衛生部員に対しては連絡兵として本隊との連絡に当らせることとなった。また凍傷患者の数が増加している。16日になり鉄道沿線近くにたっする。

一月十日　曇り時々雨　李茶山　行程28キロ

「昨日の第二中隊の患者1130頃死亡す。本日の戦闘に於て第一中隊一名負傷（大腿軟部貫通）するも独歩にて前進す。」

「今日の出発は8000だ…第二中隊の昨日の患者が心配で，早めに宿舎を出ていく。機関銃の宿舎を通りすぎようとした時に頭に白い包帯を巻いた下士官の姿が時に目を引いた。昨夜下山の折，転落して前頭部に長さ2.5センチ大の挫創を受けたが，創は浅く大したこともなさそうだ。

心配した第二中隊の兵隊（補充兵役二年兵）…簡単に診る。顔貌憔悴し活気なく，脈拍は緊張弱り頻数である。38度くらいの熱を手掌に感じ，羅音を聴取したるにつき，強心剤（ビタカンファー2個）と重曹を多量に与えて少し下りた平坦なる道より担架に乗せる。

一人歩くもなかなか容易でない，況や担架を担いで部隊と共に何で行けようか，本隊と一時間ほど遅れて立派な石畳の山街道に出た。彼処に部落があるがどうも雲務洞らしい。苦力でも獲得できればと思ってみたが，街には猫の子一匹いない。…万策尽きてそのまま…六キロほど南下し，再び山に登る。

中腹にて…患者が下顎呼吸をなし，脈拍は殆ど触れない…意識不明なり，本部の衛生兵を呼んで応急処置をするも遂に1240頃鬼籍にいる。周囲の兵隊は何喰わぬ顔で盛んに飯盒を『がちゃがちゃ』やっている。…患者がなくなり気軽な気持ちで部隊についていく。…

山向こうで，突如銃声がする。保安隊と又逢ったのかと思いつつ歩度を早めて前進すると，道端に支那人の死体が…転がっている。更に行くと尖兵中隊長が唖然としてやって来る。何かと尋ねると，敵の残した拳銃を暴発させて兵一名負傷すと。…患者は右大腿軟部貫通銃創で，幸に骨折も神経損傷もないし，出血も認めない。『ヨシ，担架はとても通れぬ，歩いて行け』と命ずると『行きます』と明瞭に返答する。…二本杖を頼りに歩き出す。…衛生兵を付けて尖兵中隊と共に前進させる。…異常なく宿営地まで到着した。…後略…」

※11日の記述では機関銃中隊の兵士の鞍傷の様子が生々しい。弾薬手は全員鞍傷をつくり，5－7センチの大きさだったとしている。この時点まで，またここでも特に治療した様子はない。

一月十一日　曇　小幹水　行程約30キロ　「第二中隊に捻挫一名生ずるも部隊と共に前進す。第四中隊に一名腹痛及び凍傷を生ぜるものあるも歩行可能なるにより続行す。（回虫病）一機の兵一名断崖より転落し右腕間接捻挫をうく。」

「…尖兵が顔を出す途端に射ちまくられた。迂回路を左にとって行くと又バンと音がする。かくなる上は強行突破と決め込んだが，一斉射撃が始まった。時々跳弾が「ひゅーっ」と頭上をかすめる。暫くして，機関銃の衛生兵と一緒になった。彼の話しによると，弾薬手は皆背中に鞍傷を作ったという。大きいので直径5－7センチ程度で，小さい奴は早や治癒したと。無理もないだろう。代用弾薬箱に10連，その上に自分の装具だから駄馬が居る時の様なわけには行かない。最近は箱を捨てて天幕に包み下に綿を敷いていると。…」

※12日，この日夜間行軍を再度命じられ不満を漏らしている。

一月十二日　氷雪　唐黍　行程約12キロ　「本日発生患者無くこれまでの患者も幸にも部隊と共に行動可能…。明日十三日1400まで大休止，兵員の疲労回復を図ると共に，爾後行動期間の糧抹を準備す。」

「…二中隊と機関銃にも捻挫患者が一名出たが，これは大したこともない。皆担送だったの

が幸だった。0800出発し，稜線に沿った山道をぐるぐる回り，1200頃大田湾に到着した。…前から『設営者前へ』の号伝が来た。だらだら下りるとここが唐黍だ。部落の入口に大隊長殿が立っておられた。兵隊をここで最後の休養をさせ，爾後の夜間行動の準備をさせると言はれた。明日昼過ぎまで休める嬉しさと，又夜間行動かという憂鬱とで頭の中が混乱状態に陥った。2000隊長集合があり，各隊に戦闘任務の付与があり，衛生部員の配属を申し渡さる。…」

※13日，朝出発準備中に攻撃を受け混乱に陥る。負傷者を運ぶ担架が進まないこと，路面の凍結と斜面であるため，担架の転倒が頻繁にあったことが記されている。また負傷者の自決はこの日のことである。

一月十三日　曇り（氷雪）唐黍　出発　行程約20キロ　「本日の戦闘に於て，第三中隊戦死一名，一機中隊負傷一名（胸部貫通）を出す。歩行不能担送とす。本日より，第二第四中隊分進するに付き，衛生部員の配属をなす。各隊戦病者四名を大隊救護班に収容し，同行す。従って，担送一，独歩四を同行することとなれり。途中にて第四中隊の，十一日発生せし腹痛（回虫病）兼凍傷患者自決す。」

「朝から一週間分の食事調製で大騒動だ。…出発時刻も迫る昼飯の準備をしていると「けたたましい」銃声が耳を衝く。すわ敵襲だ，飛弾が周囲に散り始めた。只事でないと思っていると，隊長殿が裏山に退避せよと言う。兵隊は折角作った食事を未だ詰めていないので『どぎまぎ』している。遠方で『早く出よ』『飯は放っておけ』と叫ぶ声がした。隊長殿が心配して叫んでいるのである。

一機中隊に負傷者が出たという，行ってみると蒼くなって倒れている。胸部貫通らしい。早速戸板で，裏山の影へ救出し，応急処置をなし，直ちに収容隊に応急担架作製を命じ，輸送準備に取り掛からせる。三中隊でも戦死したという。部隊は何時とはなく所命の地点に集結した。前進と叫ぶ声がした，尖兵長らしい。弾は飛んでくる，本隊は出て終った。担架は例によって，遅々として進まない。道なき所を行くのだから無理はない。

…中略…

前とは連絡が切れ姿も見えない。気ばかりがあせって，遂に担架兵を叱る。やっとの思いで追いついた途端に『前に号伝，担架到着』直ぐ部隊は動き出す。一寸も休む暇がない。しかしこんなことには馴れているから別に腹も立たない。愈々今夜から担架を持って夜行軍かと思うと先が案ぜられる。

一里位来た頃に『ぼーん』と言う爆音を聞いた。直感的に『誰かやったな』と脳裡に響く間もなく『軍医残れ』と号伝が来た。直ちに行ってみると，救護班に収容していた四中隊の回虫病兼凍傷患者が，手榴弾で自殺している。検案していると中隊長がやって来た。誠に申し訳ない。お詫びもそこそこに埋葬して頂き担架に追及した。

小さい部落の手前で大休止だ。夕食を摂っている内に，暮幕で周囲は閉ざされて来た。…種々注意を与えて出発した。

…中略…

遂に決心した。担架を持たない兵を全員連絡兵に出し，決して『担架遅れた』の号伝を送らせず，途中の誘導にし担架を邁進させることにした。しかし暗黒と凍結した路面はどうしても担架を進ませてくれない。…前進を督励するが転んだり，滑べったりでなかなか進まず，乗っている者も，担いでいる者も命がけだ。こんなふうにして十四日の朝が来た。」

一月十四日　曇り　大幼　行程約20キロ　「昨日の第一機の傷者1500死亡す。三日来の氷雪により凍傷患者三名発生す。」

「部隊と大分遅れてやっとの思いで退避場に着いた。…朝食を終えて患者を見舞。担送患者蒼白な顔を上げて盛んに水を呉と言う。昨夜の難行軍で出血でもしただろう，気掛になり包帯交換をなす。矢張り思った通りであった。

…中略…

1400敵の射撃を受け直ちに出発す。大幼頂を出て間もなく，戦傷患者は死亡した。昨夜あれほど苦労し，其の上に叱られて連れてきた甲斐もない。…別に敵影も見えないので引続いて行軍だ。…後略…」

一月十五日　晴　小水口　行程約25キロ　「収容患者独歩三名異常なし。本日患者発生なし」

「黎明時小水口に到着。禿山の草叢の中にもぐり込む。出発以来始めてお日様を拝む。…小さな部落に差しかかると，何か大声で叫びながら洋砲で射って来た。通訳に聞いてみると夜盗だと騒いでいるらしい。兵一名負傷したと言う。見ると小さな弾で大したこともない。黎明時までに…白鷺塘南側に出た。」

一月十六日　晴　白鷺塘南方　行程約12キロ　「順調に行くも，土民の洋銃に依り昨夜傷者一名発生するも独歩可能なり。その他異常なし。」

「今日も日本晴れだ，患者の弱ったものは，下部落で炊事してもよろしいと命ぜられ飯を炊かせる。途中の民家で手に入れた乾芋を喰っていると微かに汽笛の音が聞こえる，錯覚かな？…傍にいた兵隊に尋ねると確かに汽笛だと合鎚を打つ。何となく嬉しくなり…。…1200頃土匪の射撃を受けたがこれを撃退しもとの静けさに帰った。今夜は渡河する…民船二隻あり，瞬く間に渡ってしまう。…後略…」

3）激戦と死傷者の激増―1月17・18日

17・18両日は鉄道線確保をめぐる激しい戦いが続き戦死者19名，負傷者48名を出す。戦闘は17日午前10時に中国軍の攻撃で始まっている。激しい戦闘で「…付近は血の海だ。岩蔭，木陰，川辺を問わずうなっている」という状態となる。応急担架を作製し患者収容に当たっているが，患者整理にめどがつくのは夕方になってからである。

夕刻突撃敢行となり，大隊長から「最後の処置を準備しておけ」と命令が下っている。暗号掛が恐らく暗号表焼却のためであろう，マッチを探す様子がえがかれている。患者を担送することが困難なため背に負って運んでいるが，患者の背中にかきつく力がないため困難をきたしている。

18日も戦闘が続き，午後4時半頃中国軍に包囲され多数の死傷者を出している。軍医は戦死者の遺留品と，切断した小指を軍衣・外套の物入れにいっぱいになるまでいれている。ここでは戦死者の処理の後負傷者にかかっている。

一月十七日　晴　煙山　行程約16キロ　「本日の戦闘に於て戦死八名，戦傷二九名（内担送八）を出せり。戦死傷計三七名」

「黎明煙山の谷間に沿うた山麓に隠蔽す。退避場は山影で日向を追って兵隊が右往左往する。自分も日向ぼっこでもしようと思って立ち上がる。途端に大隊長殿が大声で怒鳴り出した。『早く人目に付かぬ蔭に入れ』と。当番が飯を出すが食思不振，霜柱の立っている木陰に外套を敷き横になってみたが，下からじめじめとした冷気が腰の付近を襲い眠れない。

1000過ぎ突如『バンバン』という銃声に続き『ぼんぼん』と言う爆裂音が後ろの方で数発聞こえた。又来たかと思って，上半身を起こしてみると，真っ向の稜線に二・三人ちょろちょろする人影が見える。『軍医殿前に敵が出た。危ないからここに来てください』と誰か解らぬが本部の兵隊が叫ぶ。一寸間を置いて『ぶすぶす』と周囲に弾が散る。自分の直ぐ上にいた工兵の兵隊がやられた。どうも即死らしい。後ろの方

にいた担架兵が又一名やられた。前頭部を擦過したので大したことはないと言う。

本部の近くの凹地に入ろうとする時に，爆裂音がした方面から『軍医前へ』の声がする。衛生兵一名を連れて行ってみると付近は血の海だ。岩蔭，木陰，川辺を問わずにずらりとうなっている。一通り見て回り応用担架六ケを作製すべく，収容隊長に命じ，ぼつぼつ治療に掛かる。

後ろの山を攻撃中の中隊から又二名出たと言う。担送か独歩かと質すと，歩けない様子だとのこと。早速又担架の注文をする。付近には竹はなく，灌木ばかりで担架になりそうな木はない。

…中略…

大隊長殿が来られた。『担送幾つか』と尋ねられる。兎に角薄暮迄に輸送の準備をせよと内示を受け，傷の整理に掛かるが，銃声は熾烈，全く予想が付かぬ，山の患者を収容に出かけたがとても担架が通りそうもない。担架を置き，下士官と担架兵を連れて樹木に絡む薔薇をかけ分けて登ってみる。一名は足で歩行不能。一名は頭でぼつぼつと歩ける。手運びで，急峻な斜面を下げてみるが，なかなか進まない。担架兵が，円匙で薔薇を切り開きながら足場を作っている。夕刻になって，ようやく患者の整理も付いた。

…中略…

敵は益々増加し，進路方向に下りて来はじめたと云う。大隊長殿が又来られた。『敵の主力に向かって突撃だ』『最後の処置を準備して置け』と言われた。暗号掛の下士官が燐寸を探して歩いている。薄暮兵力の集結を完了。先に示された増援の兵も救護班に来た。出発準備完了すると共に，尖兵小隊の直後に担架を進める。

…中略…

二〇〇米位行った山の回り角で『がやがや』声がする。支那兵が行き先を遮っているらしい。間もなく『わぁー』といった突撃の喚声が聞こえる。静かな夜が再び修羅場と化し，物凄い銃声と手榴弾の炸裂音が山に木魂して耳が痛い。前進がないので前に出てみる，敵は少し退却して相変わらず盲射を続けている。尖兵小隊に負傷者が二名出ている。森の木陰に遮蔽して，衛生兵が闇の中で治療している。

…中略…

出来た担架から前に繰り出す。最後の患者を収容して追及すると，前が停止している。左の山から側射を受けて前進不可能だと言う。今引き上げたばかりの一〇〇米くらい横の高地で『がやがや』と言う声がする。早くも敵が出来たらしい。只解るのは「多々有々」の支那兵の声である。

今度は救護班が一番風当りが強くなった。今まで伏せて動かなかった担架もぼつぼつ匍匐で前進し始める。と動かないのが二・三人いる。『どうした』と尋ねると『やられた』と言う。頭の上で手榴弾が二三発炸裂した。爆風が顔を撫でただけで別に怪我もない。腹匐で側に寄ってみると収容隊の担架兵である。『歩けないか』『足です』と答える。匍匐の担架も岩蔭まで退がり見えなくなった。

…中略…

後に残されたのは自分と患者だけである。患者を抱き上げてみるが駄目だ。無理もない，大腿骨折している。『ひゅんひゅん』と近弾が頭を掠めて飛び去る。前はどんな様子かと出てみると曲り角のところで何と路上は死体の山だ。其の先の方では担架が二つ転がっている。戦死者の銃と剣を外して両肩に担い五十米程坂道を降ると，大隊長殿が…座り煙草を吹かしている。この偉容に接し始めて自分も冷静に帰り詳細を報告した。後は頼む前進するぞと一言残して立ち去る。

一段さがった崖の下で呻めく声と激励する声とが交錯している。行ってみると，救護班の衛生兵で，下腿の骨折貫通らしい。中尻衛生曹長が盛んに元気付けている。またまた三名増した。千客万来だ。…担架と独歩患者を進める。新客の処置に困ってしまった。兎に角この線を離脱しなければいけない。…二名胸部を射られて相

当に重傷だが衛生兵を付けて独歩で行かせることにした。足をやられた衛生兵は中尻衛生曹長に背負わせて出発し…背負い運搬も長距離は続かない。思い切って天幕に包み松棒で担ぐことにした。…しかし生憎と松の木が細かったので，真中から折れたが周囲は禿山で木は一本もない。又背負いが始まった。出血多量のためか背中に掻き付く力がなく，直ぐ滑り落ちて終う。

…中略…

連絡は切れてしまった。前に…音がする。敵かと地を透かして見ると友軍であった。やっとのことで追い付いた。黎明前に宣章に通ずる立派な自動車道に出た。…又山道を登り始めた。…戦病患者二名を救護班で収容した由，後で判明す。」

一月十八日　晴　巫家山　「昨日の戦傷者中（担送）二名は本日輸送途中死亡す。本日の戦闘に於て戦死十一名，戦傷十九名を出す。分進中の第二中隊獅子巌に於て戦傷三名を出す。計戦死十一名。戦傷二十二名。」

「…愈々今夜決行と将兵の顔面には決意がみなぎっている。…1630頃又も敵に包囲された。昨夜の敵が追尾して来たのだろう。別に慌てることもなく例により心得たりと皆装具を身に付ける。…担架も出発準備に掛かる。

1800頃尖兵小隊が前進を始める。何んな様子かと谷間に降りて行く途中に二名負傷者が出た。二名とも足だ。又担架を至急注文し，応急処置だけでもと思って用意に掛かると，前から『軍医前へ』と号伝が来た。鉄鉢に身を固めて行って見ると，二名戦死三名負傷だ。横に分哨に戦死傷が出たのだ。縁起でもない通報が相前後して入って来る。

…中略…

何時しか暮幕も垂れて来た。機関銃の援護射撃で兵隊二名と共にもとの位置に帰って見ると，後衛小隊から又一名出たと言う。まず戦死者の処置に掛かる。遺留品と切り取った指で，軍衣，外套の物入れは一杯だ。

…中略…

敵の射撃も止まり，又もとの静寂に帰ると却えって不気味だ。転がっていた担架をこれ幸と使用し，後ろの患者を整理に掛かる。後衛小隊に加勢を頼み，再び例のごとき輸送に移る。…道は急峻な下り坂，崖道かと思えば石階段，気はあせっても担架は進まぬ。…『もう後僅かだ』と担架兵を元気付けるが足がふらふらして一人歩きも容易でない。当番が見兼ねて交替してやる。

最後の稜線を中程まで下りたときに爆音と共に銃声が聞こえた。第一線は鉄道に着いたのであろうか。それにしても爆音が怪しい，もし鉄道でも爆破されたのではないかと気掛りになる。…前から一人兵隊が来た。…『様子はどうだ。』『大成功です。守備の敵を奇襲して目的物の鉄橋は確保しています。』と知らせて呉れた。間もなく鉄道線路に出た。…目的の新岩下に十九日0200本隊と遅れること三時間にして到着。お互いに大成功を喜び合った。…後略…」

4）　戦闘終了―1月19日以降

19日から「日誌」の最後となる25日までは戦闘もなく平穏な日が続く。19日には衛生材料の空中投下を受ける。この後25日にかけては患者の収容と後方への輸送が実施されている。

一月十九日　晴　新岩下　「集成中隊，出撃により戦傷二名。第二中隊（羅家洞）戦死三名，戦傷八名（内担送四名）を出す。」

「爆音に夢を破られた。…友軍機だ。…第四中隊，引続き第三中隊より無血所命地点を占領と電話が入る。未だ第二中隊からは何とも言って来ない。『恐らく不成功じゃないか』と，ピンと頭に響いた。…衛生材料を若干持って来た。今朝落下参で投下したらしい。二階から目薬位でも，この際有難い，大助かりだ。

…実際患者も今までに沢山収容したが，今度く

らい可愛そうな目にかけたことは無い。

…中略…

午後，…第二中隊から電報が入ってくる。渡河不成功，対岸の獅子岩に潜入し，敵と対峙中，昨日の負傷三名と副官が知らせてきた。…夕刻になると，約一ケ師に包囲せられ，これと激戦中。戦死傷者多数と知らせてきた。早速増援に混成中隊を編成して出発したが，坪石駅付近で優勢なる敵に阻止せられ，遂に連絡ならず。」

一月二十日　～　一月二十五日「略」

4. 南部粤漢打通作戦における戦死傷者の状況

最後に甲挺身隊の作戦と南部粤漢打通作戦全体で，どの程度の死傷者がでたのかを確認しておこう。

(1) 甲挺身隊における戦死傷者の発生状況

行動を開始した3日から，挺身作戦が終了した21日までに発生した戦死者は25名，戦傷66名，戦病67名（合計158名）であり，戦死傷者発生率は実に17.1%，戦病者を含む患者発生率は29.7%に達した。

実に部隊戦闘力の1/3近くが失われたのであり，中国側の抵抗がさらに継続した場合には壊滅的打撃を受け敗北したであろうことを示している。実際この数字は，南部粤漢作戦参加3部隊の戦死傷率5.5%，戦病発生率9.5%（患者発生率では15%）に比べても異常に高く（この点後述），いかに無理な作戦であったかということを明瞭に物語っている。すでに見たように，中川自身も「救護日誌」のなかで作戦を振り返り，「実際患者も今までに沢山収容したが，今度くらい可愛そうな目にかけたことは無い」と述べている。

(2) 南部粤漢打通作戦における死傷者の状況

表2は1月19日に部隊主力が作戦を開始した時点から，作戦が終了した2月末までの戦死傷者を示したものである。[22] 平均の戦死傷率は5.5%，戦病発生率は9.5%（表4参照）である。

戦死・戦傷の状況を検討すると，戦死1に対する戦傷者の比率は平均で2.6，戦傷の種類に関する調査（372名対象）では，銃創66%，砲創34%，航空機によるものは1名であり，近接戦による負傷が多かったことを物語っている。

表 3　部隊別戦死傷率

	戦死(%)	戦傷(%)	合計
第 27 師 団	1.2	2.7	3.9
第 40 師 団	1.2	3.6	4.8
第 57 旅 団	3.3	7.6	11.1
平　　均	1.5	4.0	5.5

部隊別の戦死傷率（表3）では第57旅団が際だって高く，戦死率で他の部隊の3倍，負傷率でも約2倍を示している。第57旅団に属していた独立歩兵第63大隊は「零下5－6度，氷雪に被われた高度4000—5000メートルの山岳地帯を昼夜兼行で踏破中，満足な靴を履くもの皆無。手袋もまともなものは僅少」といった状況のもとで戦闘を続けた。[23] このような作戦開始前の準

表 2　参加部隊戦死傷者一覧

	戦死			戦傷			合計
	将校	准士官以下	計	将校	准士官以下	計	
第 27 師 団（極）	13	143	146	35	335	370	526
第 40 師 団（宮）	11	132	143	18	433	451	594
第 57 旅 団（黒）	10	176	186	29	401	430	616
計	34	451	485	82	1169	1251	1736

注（22）『業務詳報』「患者の状況」。
（23）同上資料。

表 4-1　部隊別戦病者数

	入院	在隊	計
極　部　隊	523	762	1285
宮　部　隊	944	235	1179
黒　部　隊	190	345	535
合　計	1657	1342	2999

表 4-2　部隊別戦病発生率

	入　院	在　隊	計
極　部　隊	入院 3.8 %	在隊 5.7 %	9.5 %
宮　部　隊	入院 7.5 %	在隊 1.9 %	9.4 %
黒　部　隊	入院 3.5 %	在隊 6.2 %	9.7 %
平　均	入院 5.3 %	在隊 4.2 %	9.5 %

備不足が，中国側の抵抗の激しさとあいまって損失を増加させたのである。

さらに注目されるのは表4に示した通り戦病者の多いことである。3部隊平均の発病率は9.5%に達している。病気の種類はマラリア，赤痢，パラチフス，流行性脳髄膜炎，回帰熱等であり，この他冬期・山岳地帯を戦域としたため凍傷，行軍途中の転倒・転落による負傷者も多かった。また冬であるにもかかわらずマラリア患者の多発した原因として，兵隊の栄養不良と強行軍による疲労が原因としてあげられている。[24] 無理な作戦が兵士に多大な負担をおわせたことは疑いないところであろう。[25]

以上紹介した資料は，第2次大戦末期の中国戦線において，日本軍がおかれていた状況の一端を明かにするものである。この資料から，日本軍の補給・後方支援体制が不備だったこと，同時にそれを補うかたちで，住民に対する強制徴発が日常化していたことなどをうかがうことができる。そのような状態で遂行された作戦の結果，戦力の低下と中国側の抵抗が相まって，甲挺身隊では部隊の3分の1の戦力を失い，南部粤漢打通作戦全体でも，485名の戦死者と，1736名に及ぶ戦傷者をだしたのである。

このような犠牲を払いつつ遂行された南部粤漢打通作戦は，一応所期の目的を達成するものの，フィリピンを失い，太平洋方面から米軍の本格的攻勢が始まっていた状況のもとでは，なんら戦略的意義を持たないものであった。

以上本稿では南部粤漢打通作戦にかかわる資料の紹介を行ったが，第2次大戦の実態を明かにしていくためには，今後も作戦レベルで，後方の支援体制なども含めた軍事史的分析を深める必要があると考えられる。すでに経済史の分野では，戦時経済にかんして一定の研究蓄積があり，また政治史においても同様である。そのような先行領域の成果とリンクさせることによって，戦時体制のもとにおける，日本及びその植民地・占領地域の実態を，より立体的に解明することができるであろう。本稿はそのためのてがかりを得るための作業の一つである。

（大阪千代田短期大学専任講師）

注 (24)　同上資料。

(25)　作戦に当たった部隊の装備が劣悪であったことは当事者にも認識はされていた。第20軍参謀長川目少将は12月中旬，第40師団を視察したが，「将兵が夏服のままで殆ど軍靴を履いておらず，支那靴をもちいており，銃器の他は水筒と飯盒を装着しているだけで，所在の洞窟などの隠匿食料を探し食事のたしにしている状況」に驚いている。その後も物資補給は結局本作戦には間に合わず，大半の兵士は夏服のまま戦闘に入ることとなった（『支那派遣軍』67頁）。